

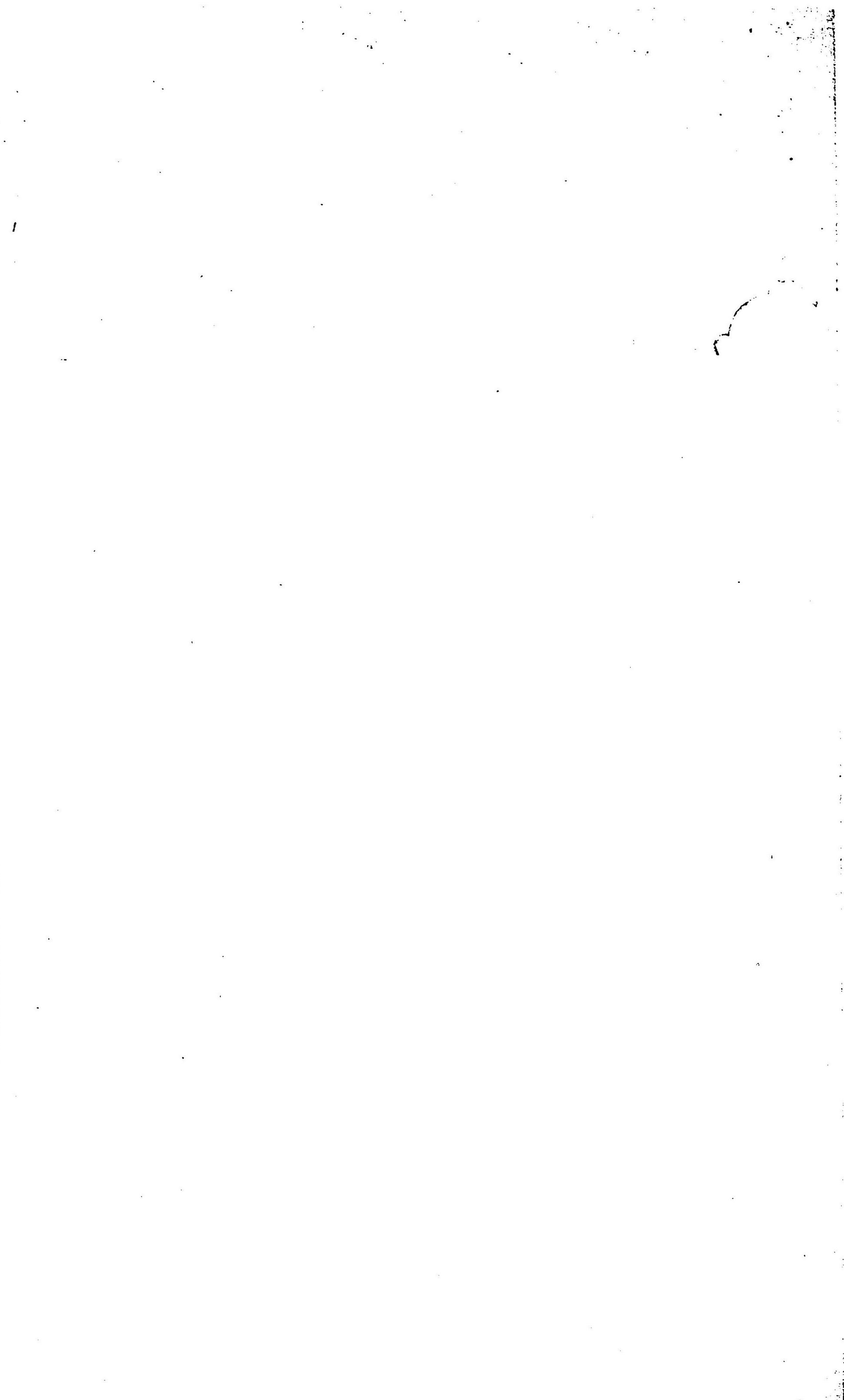
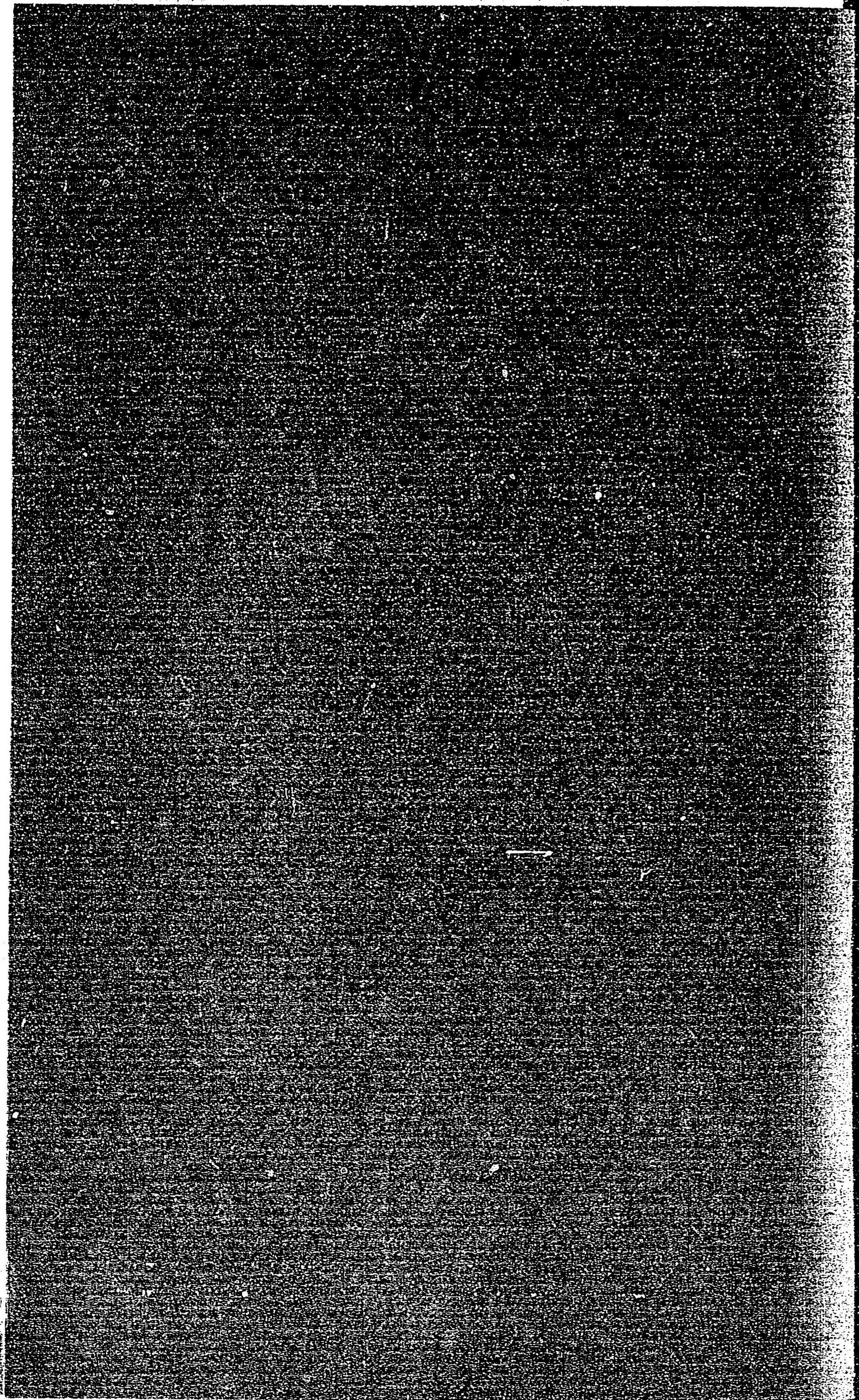
非賣品

中學讀本
三卷
參考書

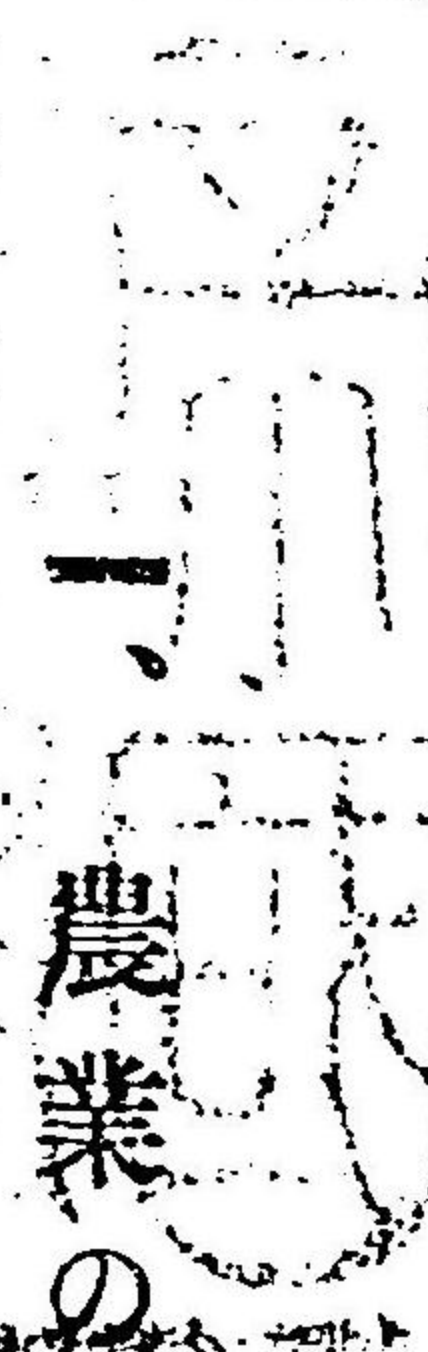
全

明治書院編輯部編
明治書院發行

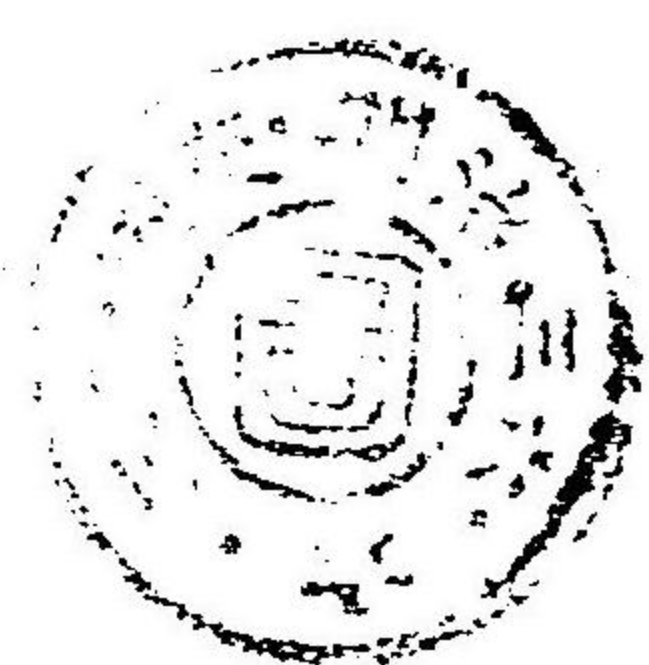




中學讀本卷三 參考書



農業の快樂



○作者徳富猪二郎氏は、龍本の人、同志社に入りて、英學を研究し、成業の後、新日本の青年、將來の日本を著して、大は、文名を博せり、明治二十年、國民之友を發刊し、また、家庭雜誌、英文雜誌、極東、國民新聞等を創めたり。かつて、歐洲を漫遊し、歳餘にして歸朝し、尋いで、内務省勅任、参事官となりしが、幾くもなくして官を辭せり。今現に國民新聞の主筆たり。『社會と人』は、著者が、曾て、國民の友、或は、國民新聞紙上に掲げたる論文、所感等を集めたるものなり。

○手を農事に染む 手を染むとは、その事にたづさはる意。○自然的作用云々 天地自然の理は、人力を以て、如何ともすべからず。かくて、これを人事の上に應用すれば、所謂、着實の、いかに大切なるかを知り得べしとなり。○科學 源因結果の理法によりて、支配せらるゝ學問、すなはち、理化學、博物學の如きもの。○美趣 美といふことの趣味なり。○陶淵明 名は潜、淵明はその字なり。或はいふ、名は淵明、字は元亮と。陶侃の曾孫なり。少くして高趣あり、曾て、彭澤の令たりしとき、郡、督郵を遣はし、に、縣吏、束帶してこれに見えむことを請ひしかば、潜歎じて曰く、吾れ、豈、五斗米のために、腰を折りて、郷里の小兒に向はむやと。即日、印綬を

解きて去り、歸去來を賦しぬ。また、五柳先生の傳を著して、以て、自ら、比ふ。潜、その先、世々、晋の臣たりしを以て、肯て、また宋に仕へず。元嘉四年十一月卒しぬ。世に、靖節先生と號せり。○別墅 別莊なり。晉書謝安傳に、「方秦寇至、朝野震動、安夷然與兄子元、圍碁賭別墅」と見え、註に「墅、田廬也」とあり。

二、旅行の趣味

○作者貝原益軒は、名を篤信といふ。筑前の人、松永尺五、山崎闇齋、木下順庵等の門に遊び、名聲、一世に高し。晩年、藩侯に仕ふ。正徳四年歿す。年八十五。著書甚だ多し。『樂訓』は、著者八十一歳の時の作にして、總論、節序、讀書、後論の四篇に分ちて説き示せる教誡書なり。○萬戸侯 一萬戸も戸數のある大地に封せられたる大名といふことにて、大名の大なるものをいふ。

三、霧島山に登る記 その一

○橋南谿は、名を春暉、字を惠風といふ。宮川氏、南谿は、その號なり。別に梅花仙史といへり。伊勢の人、京都に出でて醫を業とし、頗る、名聲あり。壯年の時より遊歷を好み、足跡、殆ど、天下に遍し。著書少なからず。文化二年四月十日歿す。『西遊記』は、正續各五冊あり。南谿が、西國を遊歷せし時の紀行なり。紀行書中の上乗なるものにして、世に有名なり。

○霧島山 日向大隅の界に聳えて、高さ五千五百尺あり。睡眠火山に屬すれども、時々鳴動して、

灰石を飛ばす事ありとぞ。○海陸二日路 薩州鹿兒島よりの路程をいふ。○二神垂跡 伊邪那諾、伊邪那冊の二神をいふ。この文の首に、「昔、あめつち、未だ、開けざりし時、諾冊二柱の御神、天の浮橋の上より、霧の海を詠め下し給ふに、島の如くに見ゆるものあり。二柱の御神、天のぬぼこを以て、これをさぐり見たまふに、國なりければ、即ち、この處に跡を垂れたまふ。これ、霧島山と名づくる由來にして、その銚を逆しまに下し給ひしが、今に至りそのまゝに、この山の絶頂にたちてあるを、天の逆銚といふ云々」とあるを受けたる文なり。○近國にての大社 これ即、霧島神社をいふ。この社は、高千穂峰の南麓に在りて、彦火瓊瓊杵尊を祭れる官幣大社なり。○坊もと、僧寺を坊といふなれど、こゝにいへるは參詣者を宿せしむるやどのことなり。○先達 修驗者の勤行を積みて、峰入の時など、同行に先きたちて、先導するものをいふ。俚言集覽に、「諺草に文選庾元規讓中書令表、位超先達、注、先進之人、今山臥之長達云々」とあり。○櫻島山 鹿兒島灣中に在る火山にして、薩摩に屬せり。○萬仞 仞は、もと八尺をいふ名なれども、それには拘はるべからず。○地軸 地理學上、地球の南極より北極に貫きたる一直線を想像して、地軸とはいふなり。地球の自轉の中軸なればなり。たゞし、この文にては、地理學上の術語にいひたるにあらで、それよりは、廣き意義にて用ゐたること、知るべし。

四、霧島山に登る記 その二

○唐金 青銅のことをいふ。銅七に、鉛三ほどを調合したる金屬なり。その製法の、唐土より傳

はりたるより、この名あり。○石突 鎗刀などの本を、包む金具の處をいふ。大鏡に、「御太刀の石づきをとらへ」などありて、古くより、用ゐられる語なり。

五、嚴島

○作者齋藤馨は、字を子徳といひ、竹堂と號す。仙臺の人、業を増島蘭園に受け、又、昌平學に入りて、安積良齋に師事し、文章を工にす、嘉永五年閏二月歿す。年三十八。著す所、讀史贅議、竹堂文鈔等あり。

○嚴島 廣島灣の西南に在り。東西二十町、南北二里半、俗に宮島といふ。○僧空海 姓は佐伯氏、讃岐多度郡の人、弱冠にして佛門に歸し、後入唐して、大同元年歸朝し、嵯峨天皇の寵任を受く。弘仁七年高野山に入りて金剛峰寺を創む。承和二年入定。延喜二十一年、諡を賜ひて弘法大師といふ。○詭形 恠しき形なり。○讚嶂 嶂は障と通ず。山峰の屏障の如くなれるをいふ。讚嶂とは、すなはち、讃岐の山々をいふ。○宏敞 宏は廣大なる意、敞は、史記淮陰侯傳に、「行營高敞地」とありて、説文に、「平治高土、可_レ以遠望也」と見えたり。すなはち、廣く高みの地にして、遠方まで、見はらし得る意なり。○堂祀天女 嚴島神社は、國幣中社にして市杵島姫、田心姫、湍津姫を祭れり。○海滄 海際なり。○激澗 正韻に、「激澗水溢貌」とも、「水動貌」とも見えたり。水滿ちて、波の揺ぐ貌なり。○海魚欲出 音樂の面白さに、海魚までも感動して、浮び出でむとすとなり。荀子勸學篇にも、「昔者瓠巴鼓瑟、而流魚出聽」とあり。列子にも、「瓠巴鼓瑟、鳥舞魚躍」と

あり。瓠巴は、古の善く瑟を鼓せし人の名なり。○天文中云々 毛利元就の陶晴賢を嚴島に討ちて、これを殺し、は、弘治元年十月のことなり。天文は弘治の前の年號なれば、作者はそを思ひあやまりたるなるべし。○毛利元就 卷二、七、「元就戒諸子」の條に、傳出でたり。○陶全姜 陶晴賢の號なり。○後昆 後世に同じ。書經仲虺之語に、「垂裕後昆」とありて、蔡傳に、「垂_レ優足之道_ニ後世_ニ」とあり。

六、人の三景の優劣論を駁する書

○成相山 丹後國與謝郡の殆ど中央に位せり。その絶頂を、鼓ヶ嶽といふ。天の橋立は、その南麓に當れり。○樗岬 同じく與謝郡にあり。成相山よりは、南に當りて、少しく西によりたる處にあり。

七、金澤八景

○作者菊地純は、字を子顯といひ、三溪と號す。紀伊の儒者なり。文と詩とに名あり。明治廿四年歿す。年七十三。

○金澤 武藏國久良岐郡にあり。○鼎鑑 鑑は韻會に「楚耕切、音鎗、釜鑑」とあり。通俗文に「甬有足曰_レ鑑」と見えたり。宋史太祖紀に、「雷德驥判大理寺、言趙普強_ニ市人第宅_ニ、上怒叱曰、鼎鑑猶有耳、汝不聞_ニ普吾社稷臣_ニ乎」とあり。起句これに原づけり。○千里鏡 遠望鏡のことなり。○箏柱

コトチなり。雁の形に似たるより形容せるなり。○鯨吼 鐘のひびきなり。後漢書班固傳に、「於是發鯨魚、鏗華鐘」とありて、註に、「海岸中有大魚、名鯨、又有獸、名蒲牢、蒲牢素畏鯨魚、鯨魚擊蒲牢、蒲牢輒大鳴、凡鐘欲令其聲大者、故作蒲牢於其上、撞鐘者名爲鯨魚」と見えたり。これより轉じて、鐘のことを、直に鯨といふに至りしならむ。○春容 優游迫らざる意なり。禮記學記に、「善待問者、如撞鐘、叩之以小者、則小鳴、叩之以大者、則大鳴、待其春容、然後盡其聲」とあり。○誘時綺錯 綉音はトウ、集韻に、「吳俗謂綿一片爲綉」とあり。また、繡の俗字（康熙字典には正字通引「沂原繡俗作綉非」とあり）に用ゐる。こゝも、繡字の意にて、音はシウ、縫ひのあやなり。綺はあやぎぬ、又は、うすものなり。即ち、汀や澗が、繡の如く、綺の如く、つらなれる状を形容せるなり。○暮色蒼然自遠至焉 柳子厚の始得西山宴游記に、「蒼然暮色自遠至」とあるを用ゐたるなり。

八、通商上より觀たる日本の地勢

○西比利亞鐵道 露西亞本國より、西比利亞の曠原を経て、浦鹽斯德港に至り、その支線、滿洲に入りて、旅順口に至る。○ニカラガ運河 中央亞米利加之ニカラガ湖を利用して、運河を設け、太平洋と、大西洋とを聯絡せしめむとする工事なり。○幌内 石狩國空知郡にあり。○夕張 石狩國夕張郡にあり。○高島 肥前國北松浦郡に屬す。また、鷹島、多鹿島などに作る。○田川 豊前六郡の一。○生野 但馬國朝來郡にあり。○足尾 下野國上都賀郡にあり。○別子 伊豫

國宇摩郡。○木曾 信濃御嶽と、駒ヶ嶽との間、鳥井嶺より、美濃國境までをいふ。○天城 伊豆の中央にあり。山脈、箱根足柄兩山に通ず。○熊野 紀伊國にあり。新宮、本宮、那智の三山をいふ。一に、熊野三山といふ。○無盡藏 無限の寶を收めたる藏の義、藏は、三藏の藏と同意にして、攝藏、または、含藏の義なり。盧肇が宣州新興寺の碑の序に、「繕修多羅爲攝受、置無盡藏爲莊嚴」と見えたり。○磅 ポンド、英國貨幣の名にして、一磅は、時價、わが九圓八十錢弱に當れり。

九、北海炭鑛

○作者川田剛は、字を毅卿といひ、甕江と號す。備中阿賀崎の人、藤森天山、安井息軒等に學び、最も、文章に巧なり。明治の初年、修史局一等編修官となり、後、宮内省に出仕し、大學教授を兼ね。ついで、文學博士を授けらる。明治廿九年二月二日、病みて歿しぬ。著書少からず。○煤 石炭のこと。○幌内 前章に出でたり。○岩内 後志國岩内郡にあり。○噸 一噸は、二千二百四十ポンドにして、凡そ、我が二百七十貫に當る。○樟別 郁春別附近にあるならむと思はるれど、明ならず。今はその名の改まれるならむか。○郁春別 石狩國空知郡にあり。今は幾春別とかけり。○蘊藏 蘊、音、ウン、字書に、「積也、聚也、蓄也」となり。○竇道 隧道のことなり。

一〇、石炭

○落莫 なほ、寂寞といはむが如し。物さびしき意なり。韓文公送楊少尹序に、「太史氏又能張其大事、爲傳繼三疏跡、否、不落莫否」と見えたり。○この新世紀の文明 新世紀とは十九世紀をさせるなり。○石松 いはこけ、又、いはひばに同じ。

一一、印度

○作者坪内雄藏氏の傳は、卷一、一五、「自然の音楽」の條に出でたり

○釋迦 釋迦は種族の名なり。實名を喬答摩悉達といふ。中印度の迦毘羅城主の子なり。その出生の年月詳ならざれども、一般に行はるゝ説に據れば、我が紀元百〇四年に生れしもの、如し。悉達、生れて聰明なり。年二十にして妻を娶り、立ちて太子となる。王位を繼承すべき、榮譽ある身分なるにも拘はらず、夙に、現世の無常を厭ひ、二十九歳にして、宮中を出でて山林に入り、難行苦業六年にして、始めて解脱を得たり。かくて、四十餘年間、衆生の爲に説法して、遂に入滅せり。○今より四百年前云々 皇紀二千百五十六年、葡萄牙の人ヴァスコダガマ、亞弗利加の南端なる喜望峰を回り、翌年、印度のマラバルの海岸カリクトに著し、印度に於いて、葡萄牙王國の基礎を置きぬ。爾來、葡萄牙人の東洋に航する者、漸く多く、臥亞を奪略して根據地とし、尋いで、印度の海岸、及び、錫蘭に商館を建て、進みて、支那海に入り、遂に、阿媽港(澳門)を占領して、専ら、この地にて貿易を行ひ、長く、東洋の商權を握れり。後、和蘭人も、連に船舶を東洋に派し、和蘭東印度商會を設立し、その勢力、漸く強大となり、葡萄牙、西班牙の商民を驅逐

せり。かく、和蘭、葡萄牙人の相競争するに際し、英吉利人もまた、印度に渡來して、東印度商社を起し、次第に、葡萄牙人、和蘭人を壓し、盛に勢を振へり。この時に當り、佛蘭人も亦、東印度商社を建て、頻に英人とその商權を争へり、されど、英人には、クライブ、ヘスチングの如き、英雄相つき、英國の勢力を扶殖することを力めしかば、皇紀二五〇九年には、遂に、全印度を統一し、二五三七年には、英國政府は、東印度商社の政權を收め、英國女皇ヴィクトリアは、印度女皇の尊號を稱するに至れり。○孟買 英領西部印度にあり。現今、世界の木綿貿易の中心地たり。市街、日を追うて益、盛大に赴き、今や、首府カルカッタを凌駕せむとす。人口凡そ八十三萬あり。○ガンガ河 印度の大河にして、源をヒマラヤ山に發し、多くの支流を合せて、ベンガル灣に入る。長さ一五五七哩。その流域は、概ね豊饒なり。○カルカッタ ベンガル州にあり。印度帝國の首府にして、英政府のある所にして、印度總督ここに駐在せり。人口百萬に近く、公私の建築、相櫛比して、頗る壯麗を極め、俗に宮殿の市と稱せり。○印度河 源をチベット高原に發し、パンジヤブ、シンド地方に入りて、南西に流れ、終に海に入る、全長一八〇〇哩あり。○ブラマプトラ 源をチベットに發し、ヒマラヤ山脈の東を繞りて、殆ど、一八〇〇哩を流れたる後、ガンガに合す。○錫蘭島 印度の南方海中に在り。支那の史籍に、所謂、陵迦、又、獅子國にして、面積四二〇〇方哩あり。土地豊肥にして、咖啡、肉桂、茶、烟草等を産す。人民、皆、佛教を信奉せり。

一二、商人本色

○作者中村正直の傳は、卷二、三五「羊馬狼」の條に出でたり。

○羞慙 羞、音は、「シウ」、愧恥なり。慙も愧なり。○迨期 迨音「タイ」、及なり。○僉言曰 僉年音「セン」、皆也成也。衆共にこれを言ふなり。尙書虞書に、「僉曰於鯀哉」とあり。○屆期 屆は音「カイ」、至也。俗に、屆に作るは非なり。

一三、生涯の終とせよ

○解を要するところなし

一四、八重山吹

○作者千家尊福氏は舊出雲國造。弘化二年八月生る。明治五年以降、出雲大社大宮司、大教正、神道西部管長、元老院議員、貴族院議員、文部省普通學務局長、埼玉縣知事、静岡縣知事等を経て、現時、從三位勳三等男爵東京府知事たり。

一五、獨逸留學中の所感

○作者日高眞實は、東京帝國大學の哲學科を卒業して、獨逸に留學を命せられしが、留學中死

去せり。

○普國 即ち、プロシヤなり。獨逸北部平原の地に位する王國にして、その面積頗る廣く、獨逸全國の三分の二を占め、全國の人口三千餘萬あり。○ナポレオン一世 一武人より身を起して、佛帝となりたる人なり。本書卷一、三、「故郷」の條に畧傳あり。○佛國 フランスは、歐羅巴の南西に位す。政體は、共和政治なり。人口、三千八百五十一萬八千餘あり。○一舉して佛國に克ち、千八百七十年より七十一年にわたりたる有名なる普佛戰爭にて、普國の佛國に克ちたるをいへるなり。卷二、一一「ビスマルクの幼時」の條を参照すべし。○ゼルマン聯邦の盟主となりて云々 獨逸、一にゼルマンともいふ。この國は、二十二國および、三自由都府をもて組織せられたる聯邦の帝國なり。プロシヤ國王は、かねて、獨逸帝國皇帝の位に即き、世々、その位を繼承して、獨逸全國を統治し、兵馬の大權、外交の政務等を掌握す。されど、獨逸全國、直に、プロシヤ國の版圖に歸せしにはあらず。各國の君主は、立憲政體を用ゐて、その國に君臨し、自由都府は、共和政治を敷き、各、獨立の體面を有し、たゞ、兵馬の權を有せず、又、外國と盟約を結ぶことを得ざるのみなり。されば、プロシヤ王は、獨逸の帝位にあれども、敢て、王號を廢せず。獨逸帝國皇帝プロシヤ王國國王と稱す。○伯林 ベルリンは、プロシヤの國都にして、又、獨逸帝國の首府たり。人口、一百六十餘萬。市街の廣濶なる、建築物の宏壯なる、天下有數の、大都會たり。○ウエルヘルム老帝 ウエルヘルム第一世なり。一千八百六十一年、歲六十四を以て普王の位に即き、ビスマルクを擢でて内閣議長となし、ローンを陸軍大臣となし、モルトケを參

謀總長に任じ、銳意軍制の改良に従事し、遂に、千八百六十六年、埃太利を討ちて、一撃の下に、これを破りて、その在來の獨逸聯邦の盟主たりし地位を奪ひ、次いで、千八百七年、佛國と戰端を開きて、ナポレオン三世を擒にし、佛都巴里を圍みて、遂に、これを屈服せしめ、千八百七十一年一月十九日を以て、佛國ヴェルサイユの王宮において、獨逸皇帝の位に即き、この獨逸帝國統一の大業を全くせり。○倫敦 ロンドンには、英吉利の國都にして、テムス河を溯ること、二十餘哩の處にあり。世界第一の都會にして、農産物の大市場、世界商業の中心點たり。その町數、二萬八千餘、その廣袤、長さ六里、幅四里に亘り、住民は、實に、五百五十萬人の多きに及べりといふ。○巴里 フランスの國都にして、セーヌ河に跨り、ロンドンに亞ぎて、世界第一の都會なり。その規模は、ロンドンの三分の一に過ぎざれども、市街の體裁、家屋の結構等、清雅端麗にして、その風趣に富めるは、ロンドンの遠く及ばざる處なりとぞ。人口、二百五十餘萬。○醃藏 鹽漬にして藏し置きたる肉をいふ。

一六、家康朴素

○作者大槻清崇の傳は、卷一、三七、「清正讀論語」の條に出でたり。
○興關白和之年 天正十四年なり。これよりさき、秀吉、織田信雄と相戦ふ。家康、信雄を援けて、秀吉を破る。この年正月廿一日、和を講ず。○一繡被 刺繡を施したるうはぎなり。○短挂 挂は、玉簪に「懸也」とあり。また、「別也」とも見え、或は、紐に通ずれども、いづれも、衣類の

意義なし。原本にもかくあれども、或は、袷の誤にはあらざるか。袷は音「ケイ」廣韻に、「長襦也」、釋名に、「婦人上服曰袷、其下垂者、上廣下狹、如刀圭也」とありて、和名「ウチギ」なり。男女のちがひはあれど、こゝには、たゞ、上衣の意味に用ゐたるにはあらざるか。或は又、掛けもの、義よりして、上に羽織る短き衣をいひたるか。

一七、山内一豊買馬

○作者大槻清崇の傳は前章にいへり。
○山内一豊 尾張の人なり。年十三、出でて信長に仕へ、羽紫秀吉に隸屬す。天正六年祿五百石を食みて、安土城下に居れり。後、累進して、天正十八年には、遠州掛川城に移り五万石を食めり。慶長五年の役、家康に従ひて功あり、土佐に封せられて二十四萬石を食めり。慶長十年卒す。○安土 近江國蒲生郡にありて、西北は琵琶湖に面せり。信長の居城のありし所なり。安土諸將士とは、即ち信長旗下の將士なり。○鏡匣 匣音は「レン」、鏡を入れる、匣なり。○比來 近來に同じ。○簡馬 馬揃への事なり。簡は閱なり。周禮春官に、「大田之禮、簡衆也」とある疏に、「簡閱也。謂閱其車徒之數也」と見えたり。○嶽翁 妻の父を曰ふ。嶽は泰山なり。泰山に、丈人峰あり。故にいふ。一に、嶽丈、または、嶽父ともいふ。○上國 俗にいふ上方なり。史記吳世家の字面なり。○落魄 魄は韻會に音は「タク」、落魄貧無家業」とあり。史記酈食其傳に、「家貧落魄、無以爲衣食業」とあり。漢書の註に、「應劭曰志行衰惡之貌、師古曰失業無倚也」と見えたり。落託

と書くも通ず。俗にいふ「落チブルル」なり。按ずるに、史記漢書共に音「ハク」とよめり。されば必ずしも、一方に執して、タクとよますとも可ならむ。○釋褐 褐は毛布衣なり。賤者の著る所、釋は捨なり。粗末なる書生服を脱ぎ捨て、衣冠を著くる義にて、初めて仕途に就くをいふ。

一八、 蟻

○解釋を要するところなし。

一九、 採用試験

○本章も解しがたきことなし。

二〇、 畫を視て惡心を改む

○作者堀秀成は琴舎と號す。下總國古河の人、音韻語學にくはしく、また、文章に巧なり。著書、殆ど三百種に上れり。明治廿一年歿す。年七十一。説教講説は、翁が宣敎使として、敎導職として、各地にて、説教せるものをかき集めたるものにて、三十卷あり。

○水口驛 近江國甲賀郡に在り。○行者 佛教、修驗道などにて、行を修する人をいふ。釋氏要覽に「善見律云、有善男子、欲求出家、未得衣鉢、欲依寺中住者、名畔頭沙羅沙、今詳若此方行者也、經中多呼修行人為行者」とあり。○浪花 語義不詳。攝津國西成東成郡の邊(淀

川末流沿岸地方)の汎稱なり。後には、今の攝津の國の區域に當る地方を指す名ともなれり。○心齋橋 大阪市の東區にあり。○松戸の里 下總國東葛飾郡にあり。○藤房卿 後醍醐帝に仕へて、左大辨に任せられ、參議を経て中納言に至り、次いで、左兵衛督檢非違使別當を兼ね、正二位に叙せらる。後、後醍醐帝を諫めて用ゐられず、僧となる。終る所を知らず。○建武の帝 後醍醐天皇なり。○笠置 笠置山は、山城國相樂郡笠置村の東南に添ひ、大和國添上郡に接す。山上に笠置寺あり。元弘元年、後醍醐天皇、中興の業熟せず、この寺に幸して、賊を避け給ひしことあり。○勘氣 勘當に同じ、勘當の字は、唐書に見えたり。律に据ゑて罪を按ずる也。義絶するを勘當、又、勘氣といふ。是より出でたり。

二一、 瀧澤馬琴

○作者菊池純の傳は、本卷、七、「金澤八景」の條に出でたり。

○瀧澤馬琴 著作堂、玄同陳人、魁雷子等の別號あり。明和四年、江戸深川に生る。幼より、稗史野乘を好み、晝夜卷を釋てざりきといふ。近世小説家の泰斗にして、文辭絢爛、引證精博を極む。著す所、二百九十餘種あり。里見八犬傳、椿説弓張月、朝比奈巡島記等、その最も有名なるものなり。嘉永元年十一月歿す。年八十二。○稗史 稗音は「ハイ」、稗史の作る所。稗は小なり、小説をいふ。漢書藝文志に、「小説家者流、蓋出於稗官、街説巷説、道聽塗談者之所造」とあり。古の王者、閭巷の風俗を知らむとて、稗官を置き、街談巷説を取りて、これを稱説せしめたるな

り。○野乘 野史といふに同じ。勅撰にあらざる、民間にて作りたる史なり。韻會に、「乗者載也、取載事爲名」とあり。孟子に、「晋之乗、楚之檣杪、魯之春秋、一也」とある乗は、即ちこれなり。○主翁 翁は尊稱なり。猶ほ公といふが如し、史記范雎傳に、主人翁の語あり、漢書戾太子傳に、主人公の語あり。○爲所魚肉 史記項羽傳に、「樊噲曰、人方爲刀俎、我爲魚肉」また張儀傳に「爲秦所魚肉也」とあり。その他にも多く見えたり。後漢書の註に、「言人所吞噬也」とあり。○色然 公羊傳哀公六年に、「色然而駭」、註に「驚貌」とあり。○研詰 研は窮なり。窮め詰るなり。○首其所自 正字通に、「有咎自陳、及告人罪、曰首」とあり。○伎心 伎は害なり、

一一一、藤樹聲名

○作者原善の傳は、卷一、三二、「徂徠借分陰」の條に出でたり。
○藤樹 名を原といひ、字を惟命といふ。祖父に従つて加藤泰興侯に、伊豫大洲に仕ふ。後、母の老いて郷にあるを以て、辭して歸らむこと乞うて許されず、遂に逃れて國に歸る。郷黨、皆その徳に服し、世に近江聖人となす。慶安元年八月二十五日歿す。年四十一。○王文成 明の大儒なり。名は守仁、字は伯安、陽明と號す。文成はその諡なり。浙江餘姚の人、天姿英異、幼時、朱子の格物の學を講ず。正徳の初、事を論じて、貴州龍場驛丞に謫せらる。窮巷書なし。日に舊聞を釋ね、忽ち、格物致知は、これを心に反求すべくして、事物に求むべからざる理を悟り、喟然として嘆じて曰く、道ここにありと。その教たる、専ら、良知を致すを以て主と爲す。十五年、

寧王宸濠の反亂を平げしが、大學士桂萼等の爲に、その功を阻まる。後、嘉靖元年、その功を追録して、新建伯に封せらる。七年、兵部尙書を以て、安南に卒す。年五十七。隆慶の初、侯を贈り、文成と諡す。著す所、王陽明全集あり。○致知之學 致知は、大學の字面なり。大學に、「欲誠其意者、先致其知、致知、在格物、云々」と見えて、朱註に、「致推極也、知猶誠也、推極吾之知識、欲其所知無不盡也、格至也、物猶事也、窮至事物之理、欲其極處無不到也」とあり。さて、朱子は、「人には、本然の性と、氣質の性とあり。所謂、本然の性とは、その理的にして、純精なるもの、氣質の性とは、その他を稱す。玄かして、その本然の性に立ちかへるには、學問に由り、多く書物を讀み、事物を究めて、その氣質の昏濁を清め、閉塞を開くべし」と説けり。王陽明は、「心外の物なく、心外の理なし。心を外にして物理なく、物理を外にして心なし」と説き、その「心」を、良心といひ、その作用する點より、又これを良知と稱せり。而して、陽明の議論は、孟子と同じく、性善論にして、學問は、放心を求むるを以て目的とするものなりとし、人には、皆、良知あれば、決して、外物に求めずとも、我が心にだに反求せば、自ら、道に達すべしと言ひへり。故に、内省法を貴び、躬行を先にし、四書五經の如きは、我が心を註釋せるものなりとして、讀書などは、その貴ばざる所なり。かくの如く、朱子は、書をよみ、理を究めて、道に至らむと欲し、陽明は、直に心に求めむとせり。是れ、二子學說の岐る處なり。○索 音は「タク」、字書に「無底曰索、有底曰囊」とあり。こゝは、財布の義に用ゐたり。○羅拜 相列りて拜するなり。○知行合一之理 知ると、行ふとは、別事にあらずして、相一致せるも

のなり。人は、誰も、善を爲すことを欲せざるものなし。されば、眞に、善の善たることを覺知せば、敢て行はざる者なし。善を行はざるは、畢竟、眞に善の何物たるを知らざるが爲のみ。たとへば、孝を學ぶといふが如きは、必ず、勞に服し、養を奉じ、躬ら、孝道を行ひて、後、之を學べりと謂ふべし。射を學べば、必ず、弓を張り、矢を挟みて、引滿して、的に中つ。天下の學、行はずして、以て學といふべきものあることなし。學の初は、固より、行なり、疑を問ひ、之を思ひ、之を辨する、これ行なり。天下、豈、行はずして學ぶものにあらんや。知の眞切篤實の處は、即ち、行なり。行の明確精察なる處は、即ち、これ知なりと。これ、陽明が知行合一説の大要なり。

一一三、藤樹先生

○著者橋南谿の傳は、この卷の三、「霧島山に登る記」の條に出でたり。『東遊記』は、氏が、東國を遊歴せし時、見聞したる事を記したるもの、正續各五卷あり。

○大溝 近江國高島郡に屬す。分部氏の舊藩地なり。○王陽明 前章の王文成參照。○化育 徳を以て、よく、人を感化し、教育すること。中庸に、「可以贊天地之化育」と見えたり。

一一四、牛家村

○作者近藤芳樹は、家の號を寄居子庵といひ、享和元年五月、周防國岩淵に生る。本居太平、山

田以文等につきて學び、國典に精しく、和歌に長せり。召されて、明倫館の教官となり、後、明治八年九月、宮内省に出任し、十三年二月廿九日、年八十にて歿す。その著、『明治孝節録』は、皇后陛下の仰によりて著したるもの、四冊あり。

○四萬十川 シヤドカ また渡川ともいへり。流域およそ二十餘里なり。○間人 ヒマビトと訓む。蓋し土佐地方の方言ならむ。○享保 中御門天皇の御代、紀元二千三百七十六年より二千三百九十六年に至るまで二十一年間の年號なり。○莊屋 いにしへ莊園を護る人の家をいひしが、後には、一村又は數村の百姓の長の名となりぬ。○國守 高知藩主山内家なり。○同保 保は組合のことなり。○朱陳村の故事 支那の故事なり。朱陳村は徐州古濃縣にある一村落にして、朱陳兩姓の外、他の種族なく、一郷團欒して、一家の親を爲せりといふ。蓋し我が國九州の五家村、常陸のアテラ、モチカタ兩村の如きものなるべし。白氏文集卷十に、朱陳村を詠せる詩あり。左に掲ぐ。○徐州古濃縣、有村曰朱陳、去縣百餘里、桑麻青氣氳、機梭聲札札、牛驢走紆紆、女汲澗中水、男採山上薪、縣遠官事少、山深人俗淳、有財不行商、有丁不入軍、家家守村業、頭白不出門、生長游有群、黃鷄與白酒、歡會不隔旬、生者不遠別、嫁娶先近鄰、死者不遠葬、墳墓多遶村、既安生與死、不苦形與神、所以多壽考、往々見玄孫、我生禮儀鄉、少小孤且貧、徒學辨是非、祗自取辛勤、世法貴名教、士人重冠婚、以此自桎梏、信爲大謬人、十歲解讀書、十五能屬文、二十舉秀才、三十爲諫臣、下有妻子累、上有君親恩、承家與事國、望此不

省身、憶昨旅游初、迨今十五春、孤舟三滴楚、羸馬四經秦、晝行有饑色、夜寢無安魂、東西不暫住、來往若浮雲、離亂失故郷、骨肉多散分、江南與江北、各有平生親、平生終日別、逝者隔年間、朝憂臥至暮、夕哭坐達晨、悲火燒心曲、愁霜侵髻根、一生苦如此、長羨陳村民、

二五、夜の旅

○作者足代弘訓は、家、代々、伊勢神宮の神主たり。幼より、荒木田久老、本居春庭、本居大平等に學び、著書甚だ多し。正四位上に叙せらる。安政三年十一月五日歿す。年七十三。

二六、採草記

○作者土屋弘氏は、鳳洲と號す。泉州岸和田の人、現に東京に住し、華族女學校の教授たり。
○採草 蕈は音「シン」、地菌なり。採蕈は蕈狩をいふ。○聞微香 聞は嗅の義に用ゐる。聞香の技などいふも同じ。○蒙茸 茸は音「ジョウ」、蒙茸は、草の亂生せる貌。○爾栗 牛の角の初めて生ずる時、その形、爾の如く、栗の如きをいふ。こゝは、松蕈の初生のものを形容したるなり。
○錯落 入り雜るをいふ。○參差 參は音「シン」、差は音「シ」、長短齊しからざる貌。○諷意 遠まはしに、意を寓して喻すをいふ。蓋し、事々秩序あり、秩序を踐ますして、躁進するは、徒に勞するのみにて、益なきをいふ。小學外篇にも、范魯公質が、兄の子臬の榮進を求むるを曉し

たる詩の末句に、「躁進徒爲耳」とあり。この文の作者も、また、この句によりて、思を構へたるものか。

二七、捕鯨説

○作者齋藤正謙の傳は、卷二、二八、「摩耶山」の條に出でたり。
○天保辛卯 天保二年なり。○群漁 多くの漁夫どもなり。○走舸 早く馳する舟なり。○鏢 和名「モリ」の事なり。鯨を捕るに用ゐる具なり。鏢の先に、左右兩鉤あり。柄に繩をつけて、鯨に投げつけ、中れば、柄はぬけて、鏢は鯨の内に深く入りて、抜けざるやうに作れり。○旄 説文には、「幢也」とあり。尙書泰誓に、「右秉白旄以麾」とありて、釋文に、「白旄、旄牛尾」と見えたり。旄旗の屬なり。○逆 説文に、「迎也」と見えたり。○邪許 邪は音「ヤ」、許は音「コ」、「衆人共力之聲」とありて、「カケゴエ」のことなり。淮南子道應訓に、「今夫舉大木者、前呼邪許、後亦應之、此舉重勸力之歌也」と見えたり。

二八、種々の生業

○作者柳澤里恭は、字を公美といひ、號を淇園といふ。大和國郡山藩の老臣なり。性、磊落不羈にして、文武兩道に通じ、また、種々の技藝を能くし、殊に、畫に巧なりき。常に、客を好み、來訪者あれば、門を閉ぢて容易に歸らしめざりきといふ。寶曆八年九月、享年五十三にて

歿せり。『雲萍雜誌』は、その積年見聞せし事どもをまゐるせる漫録なり。四卷あり。天保十四年、始めて、これを刊行す。

○木曾 木曾川の上流、信濃國西筑摩郡、美濃國惠那郡邊の山谷の地を汎稱す。○岩茸 深山の岩中に生ずる菌なり。形、きくらげの如く、圓くして薄し。面は褐色にて粉の状をなし、背は黒くして毛あり。背の中に短き莖あり。乾して食物とす。○畚 土を盛りて擔ふもの、繩にて網の如く編みて、四隅に繩をつく。もつことは、盛籠セリコの義なりと或人はいへり。○伊勢の浦 伊勢、尾張、參河、志摩間の内海なり。○舟もやひ もやひとは、凡て、人と互に組合ふことをいふ。舟の上にいへるも同じ義よりならむ。即ち、舟をつなぐことなり。夫木集六に「かへる春、けふの船出は、もやひせよ。なほすみよしの、松かげにして、」など見えたれば、古くより用ゐれる語なるべし。○惻隱 隱も惻も共に、痛むと訓ず。隱は詩經の邶風に「如_レ有_レ隱憂」註に「隱痛也」とあり。惻隱の語は、孟子公孫丑篇に、「皆有_レ怵惕惻隱之心」とあり。

二九 記畫工良秀事

○作者伊藤維楨は、字を源佐といひ、仁齋、又、古義堂と號す。平安の鴻儒なり。學、専ら、論語を主とし、次ぐに孟子を以てし、旁ら、易、大學、近思錄等の書に及ぶ。文は、唐宋八家を宗とし、詩は、杜工部を崇ぶ。寶永二年三月歿す。年七十九。著す所、語孟字義、論孟古義、仁齋日札等なり。

○良秀 この逸話は、宇治拾遺及び十訓抄にあげたるものなれど、そのいかなる人なりしかは詳ならず。○倉惶 字書に「倉卒忽遽貌」とあり。あわつることなり。○趁 音は「シン」、走るなり。

○不動尊 五大明王の一なり。本地は、大日如來なるが、惡魔を降伏せむが爲に、忿怒身を現して、不動明王となる。大日經卷二に、「爲_レ息_二一切障、故、住_二火王_二三昧、說_二此大摧障聖者不動主眞言_一」と見えたり。○概 音は「チ」、奪なり。○三昧 梵語なり。翻譯名義集四に、「三昧此云_二調直定_一、又云_二正定_一」とあり。又、智度論五に、「何等爲_二三昧、善心一處住_二不動、是名_二三昧_一」とも見えたり。即ち、心を一處に定めて、善事を行ふを三昧といふなり。こゝに、畫法三昧と用ゐたるは、畫法の奥儀といはむ程の意なり。○不自知手之舞足之踏耳 極めて喜ぶことの形容なり。孟子離婁篇に、「不_レ知_二足之踏_レ之、手之舞_レ之_一」とあり。

三〇、 ジョルシ、スナブンソン その一、

○ジェムス、ワット 一七三六年、スコットランドに生る。幼より、玩具などを作るに巧なりき。十四歳の時、一日、湯の沸騰せる鐵瓶の蓋を、覆ひては取り、取りては覆ひ、ヒを湯氣の出づる處にあて、蒸氣の、水となるを見けることありしが、これぞ、他年大發明の基なりける。當時、グラスゴー大學より、ニューコミンの作りたる、蒸氣機器の小さき模型の修理を託せられしかば、これに因りて、苦心慘澹、多年の研究をなし、遂に、蒸氣機關を大成せり。一八一九年歿せり。○ニューカッスル ウェールスの一市にして、産炭地の中心たり。○二仙 米國貨幣の名にして、一仙は、

わが、二錢強に當れり。○志 シルリングは、英國貨幣の名、一志は、わが四十八錢強なり。○一丁字 一丁字なしとは、無學の者の謂なり。わが國にて、「いろは」の「い」の字も知らぬといふに同じ、書言故事に、「唐張弘靖曰、天下無事、爾輩挽三兩石弓、不如識三丁字」とあるに本づく。○期月 滿一箇月なり。○磅 この卷の八に出でたり。

三二一、 ショルジ、スチブンソン その二

○噸 この卷の九に出でたり。○リバープール 英國第三に位する都市にして、海港としては第一位にあり。ランカスター州メルセー河口の東岸にありて、ロンドンを距ること西北二〇五哩、マンチェスターの西南三二哩の所にあり。綿の貿易、甚だ盛にして、メルセー河に沿ひて、六哩に亘る船渠を有す。造船所、機關製造所、鑄鐵所、その他の工場、數を知らず、人口五十八萬五千餘あり。○マンチェスター 英國に於ける綿布製造の中心たり。種々の建築、美麗なる寺院、また學校等多くして、甚だ、繁盛なる都會なり。人口五十一萬ばかり。

三二二、 汽車

○作者川田剛の傳は、已に、本卷、九、「北海炭鑛」の條に出でたり。○車輞 輞は音「パウ」、字彙に「車輞、車輪外圍曰輞」とあり。○二十扇 扇は説文に、「扉也」とあり。こゝは、數詞に用ゐたるにて、二十個などいはむが如し。○電掣風馳 掣は曳也とあり。

晋劉邵白雲勢に、「素翰水解、簡墨電掣、直準箭馳、屈擬螻勢」と見えたり。電掣、風馳いづれも、疾きことの形容なり。

三二三、 軍港

○作者若林欽氏は、現に、海軍少佐たり。文に巧にして、その海軍のことを記せる書、少からず。小笠原少佐と共に、海軍々人中の二文人と稱せらる。○横須賀 神奈川縣三浦郡にあり。○吳 廣島縣安藝郡にあり。○佐世保 長崎縣東彼杵郡にあり。○舞鶴 京都府加佐郡にあり。○鎮守府 は、出師の準備、海軍區の警備、軍港、要港、防禦港の防禦に關することを掌り、並に、所轄諸部の行務を監督する所にして、各軍港にこれを置く。○司令長官 は、天皇に直隸し麾下の艦隊、軍艦、團隊を統率し、及び、軍港、要港、防禦港の防禦計畫を統理す。又海軍大臣の命を承け、所管の軍政を總理す。○造船廠 各鎮守府に隸屬して、軍艦の建造、及び、修繕の事を掌る。○造兵廠 大砲をはじめとして、すべての兵器の製造修繕等を掌る。○機關兵 軍艦の機關運轉に服役する兵種なり。○主厨 艦員の食事を供すること掌る。○軍樂生 軍樂を奏する職に任ずるもの。○測器庫 測器、及び、航海に關する圖書の準備供給を掌り、及び、氣象の觀測をなす處たり。○法衙 軍事司法、懲罰、及び監獄事務に關することを掌る。○哨營 鎮守府を守る哨兵營なり。○姉妹艦 同種同形の艦をいふ。蓋し、輓近の軍艦製造は、實に、莫大なる經營を要し、その設計、製圖等の準備につきても、既に

多額の経費を要するを以て、何れの國にても、新に軍艦を製造する時には、必ず、一の設計によりて、同時に、二艘乃至數艘の同種同形の軍艦を造りて、その準備に要する費用を節減せむことをつとむるを常とす。

三四、トラファルガルの海 その一

○作者小笠原長生氏は、慶應三年を以て生る。子爵海軍少佐を以て海軍大學校の教官たり。氏、號を鳳翼といひ、頗る文辭に富む。著す所、海戦日録、海軍史論、海軍兵士龜鑑等あり。『海軍史論』は、本邦に、未だ、海軍史と稱すべきものなきを憂ひ、帝國古來よりの海軍に關する事蹟を歴擧して、毎節に著者の意見を加へ、海上權力の必要を説ける書なり。

○トラファルガル 西班牙の南岸、ジブラルタルに近く、西の方にある岬なり。○ナポレオン一世 本書卷一、三、「故郷」の解釋の條下に略傳を擧げたり。參照すべし。○ツォロン 佛蘭西の東南岸にある佛國の大軍港なり。○ネルソン 名はホラシオ、西曆千七百五十八年九月二十九日、英國ノーホルク州、バーンハム、スオーブ郷に生る。少年の時より、身體、頗る羸弱、性質、亦温和なりしも、精神の修養に心を用ゐ、その志氣と高潔の想念とは、まばまば、校友をして感歎の聲を發せしめたりきとぞ。十九歳の時より、戰事に功勞少なからざる中に、ナイルの役、及び、トラファルガルの戰は、最もその有名なるものにして、英國の海軍は、彼によりて興され、英國の國威は、彼によりて輝けりとさへ稱せらる。子爵に昇り、海軍少將に進みて、つひに、トラファルガルの戰

に死す。享年四十八。○ケーヂス港 西班牙の西南岸にありて、バルセロナ、マラガ等と合せて共に、主要の港たり。○コリンウッド 一七五〇年に生る。一七六一年、海軍に籍を入れしより、諸處の海戦に功あり。トラファルガルの海戦に、ネルソンの戰歿せしについて、全艦隊を指揮せり。一八一〇年歿す。○信號旗 海にありては、その艦隊、常に、相隔りて、陸軍の如く、單に、號令により、又は、喇叭によりて、これを指揮し、又、傳令を派して、相互の連絡を保つ等のことをなす能はざるを以て、すべて、この信號旗によりて、その連絡を保つなり。その旗は、種々の符號ありて、皆、それぞれの意を含めり。艦中には、別に、信號兵ありて、相互の信號を交換することを掌れり。

三五、トラファルガルの海戦 その二

○巨礮 礮は音「ハウ」、砲の本字なり。音「ハク」などよみて、砲字とは、別字の如くに思へるものあるは、誤なり。○莞爾 論語に、「夫子莞爾而笑」とありて、何晏の註に、「莞爾小笑貌」と見えたり。「ニコリ」と笑ふことなり。

三六、仁川港

○作者末廣重恭は、伊豫宇和島の人なり。幼より、藩學に學び、後、東西京の間を遊歴し、林鶴梁、春日潛菴の門に入る。盛に、民權主義を唱へ、後、議會開設せられし時、郷里より選ばれ

て、代議士となること二回なり。政談の旁ら、好みて小説を著し、雪中梅、花間鶯等は、一時、洛陽の紙價を貴からしめたり。明治廿九年二月、享年四十九にて歿せり。

○透迤 透は音「キ」、迤は音「ダ」、透迤は、説文に、ナトミ袞去貌とあり。蛇などの行くごとく、うねり行くさまの形容なり。○解船 解は玉篇に小解なりとあり。解とは、艇の小さいものをいふ。解船とは、「ハシケ」のことなり。

三七、上海

○作者岡千仞氏は、字を天爵、また、振衣といふ。鹿門と號す。仙臺の人なり。今、東京に住す。

○法租界 租界は、居留地のことなり。佛租界は、佛蘭西國の居留地、英租界は英吉利國の居留地、米租界は北亞米利加合衆國の居留地なり。○輪船 汽船のこと。○東製 日本製の意。○隆棟回樞 隆棟は、むねの高きこと、回樞は、字彙に、樞は窗隙子とあれば、回轉して開閉するやうに作れる、窗のことを、かくいへるなるべし。○百貨標榜 標榜は、猶、表掲といはむが如し。表を立て、人に示すを、標といひ、書を掲げて人に示すを、榜といふ。種々の貨物に、札を立てたるありさまなり。○絡繹 文選に、「縦横絡繹各有所趣」とあり。註に、絡繹は、相連りて絶えざる貌と見えたり。人馬通行の頻繁なるをいふ。

三八、籠城日記一節

○作者服部宇之吉氏は、舊二本松藩士なり。慶應三年四月生る。文科大學に入りて、哲學科を修む。三十二年漢學研究のため、滿四箇年間、清國および獨逸に留學を命ぜられ、先づ、清國に入りしが、偶、團匪の亂に逢ひて歸朝し、次いで、獨逸に赴く。三十五年七月、文學博士を授けられ、東京帝國大學文科大學教授在官のまゝにて、八月、清國北京大學堂の聘に應じて赴任す。『籠城日記』は、氏が清國事變に遭遇せし折の日記なり。

○六月四日 明治三十三年の事なり。○團匪 義和團をいふ。後段参照。○黃村 直隸省にあり。○北京、天津 これ、亦、共に直隸省にあり。北京は、清國の首府にして、人口凡そ、百八十萬あり。周圍十里九丁餘。天津は、テンシン咸豐十年の條約によりて開きし港なり。大運河と白河と會する所の南岸に位し、白河口を浜ること凡そ十三里餘にして、本港に達す。人口四十萬餘、繁華 北京に亞ぐ。○保定 直隸省にあり。○米國教會 北京に在り。○蜚語 うはさといふに同じ。蜚は古の飛の字。史記蘇秦傳に「毛羽未成、不可ニ以高蜚」とあり。○笠置艦 清國事變に就きて、第一に太沽に派遣せられたる軍艦なり。二等巡洋艦にして、排水量、四千九百七十八噸あり。○太沽口 直隸省に在り。天津を距る十四里、砲臺税關等あり。險要の地なり。○マクドナルド氏 英國の武官出身の人にして、今は、本邦駐在英國特命全權公使たり。○柴砲兵中佐 名は、五郎、舊會津藩士、柴四郎氏の實弟なり。北京籠城中の最功勞者として列國公使會議の審議により、羅馬法王

の贈與せる寶玉を受領せり。戦功により功三級に叙せらる。○原海軍大尉 當時、愛宕水兵指揮官たり。上諭一道 上諭は、國帝の諭旨なり。一道は、一通に同じ。○教民 支那人の耶蘇教を奉せるものをさしていへり。○義和團 支那の會匪に、義和、哥老、大刀、小刀、白蓮、維新などいふがあり。こは、咸豐、同治年中(咸豐元年は、我が嘉永三年に當る)より以來、内外多事、海内騒動し、募兵ますます多くして、游民充填せしより、起りしなりとぞ。その中、義和團は、その起原、遠く、乾隆年間(乾隆元年は、吾が櫻町天皇の元文元年に當る)にありて白蓮會の支流なりといふ。即ち、一種の鄙教徒にして、その奉ずる所は、拳棒を練習し、道を講じ、神靈をわが體に附し、呪語をもて砲彈を避け、槍劍を防ぐといふにありといふ。嘉慶年間(嘉慶元年は、我が孝格天皇の寛政八年に當る)に至りて、清國政府はこれを嚴禁し、次いで、勦討の使を發したれど、遂に、これを殄滅すること能はざりき。當初、外效の宣傳は、未だ今日の如く、隆盛ならざりしが故に、義和團徒の外效に對する態度は、さまで甚しからざりしが、近來、耶蘇教の侵入するに従ひて、強固頑陋なる方法を以て、これを防がむことを企てたり。且つ國內の保守黨等、これを利用して、その排外運動の目的を達せむとしたるより、相和して、ますます、猖獗を極めたり。この義和團の首領は、端郡王といふ人なり。○武辨 わが武官といふことばと同義なり。○滋事 騒擾を起すをいふ。○安藤辰五郎氏 東京の人、卅三年四月自費を以て北京に赴き、たままこの亂に逢ひて同七月六日戦死す。○石井菊次郎 戦功によりて、勳五等雙光旭日章を賜る。○檜原陳政 籠城中、敵彈を脚部に受けて負傷し、幾くもなくして死去せり。○鄭永邦 戦功によ

りて、單光旭日章を授けらる。○德丸作藏 戦功によりて、勳六等單光旭日章を授けらる。○兒島正一郎 氏は、この戦役に戦死せり。○書記生杉山彬 明治三十三年六月十一日、我が分遣兵の入京を迎へむため、單獨、危険を冒して、馬家堡停車場に向ひ、途上、董福祥部下の馬隊のため、に惨殺せらる。○野口多内 戦功によりて、勳七等青色桐葉章、及び、金五百圓を授けらる。○狩野直喜 義勇隊中、殊功ありし一人なり。勳六等單光旭日章及金五百圓を賜はる。○小貫慶治 戦功によりて、勳六等單光旭日章を授けらる。○北京電燈會社技師小川量平 北京電燈會社、一にまた、北京電燈公司といふ。氏は、戦功によりて、勳六等瑞寶章を授けらる。○村井啓太郎 戦功によりて、勳六等瑞寶章を授けらる。○岡正一 戦功によりて、勳七等瑞寶章を授けらる。○古城貞吉 戦功によりて、同前の勳章を受く。○北京同文館 我が外國語學校の如きものにして、北京にあり、總理各國事務衙門(即ち、總理衙門)の管理する所たり。○東語教習 日本語の教官なり。○杉幾太郎 當時、戦功ありし一人なり。勳六等單光旭日章を授けらる。○渡邊知吉 戦功により勳七等青色桐葉章を授けらる。○山本讀七郎 戦功により、勳八等瑞寶章を授けらる。○松本幸八 戦功により、勳八等白色桐葉章を授けらる。○平野守信 戦功により、勳七等青色桐葉章を授けらる。○望月東涯 戦功によりて、勳八等白色桐葉章を授けらる。○中村秀次郎 戦死せり。○公使館ボーイ取締林良茂 即ち、公使館の僕長たり。戦功によりて、白色桐葉章を授けらる。○木村徳次郎 戦功により、勳八等白色桐葉章を授けらる。○小寺梅吉 戦功により、勳八等白色桐葉章を授けらる。○大西平吉 戦功により、賞金を受けたり。○若杉彌平太 戦功

により、勳八等瑞寶章を授けらる。○中根師人 戦功により前の勳章を受く。○近畿 北京のめぐりの地をいふ。正字通に、「古者王國千里曰王畿、自是以往、每五百里爲一畿、通天下爲九畿、故因之、約方千里爲一畿云々。」とあり。○拳民 即ち、前にいへる義和團なり。この拳法を奉ずるより、拳民といへるなり。○刀械 公羊傳に、「攻守之器之曰械。」とあり。○海關 即ち税關のことなり。○東四牌樓 崇文門より、安定門に連する大通の中頃に、東西南北に四達の街あり。四の牌樓建つ。故にその地方を稱して、東四牌樓といふ。○北六條胡同 胡同は街のことなり。我が何々町といふに同じ。○日本老公館内 舊公使館なるべし。○教堂 教會堂なり。○張家口 地名なり。北京の西北、五六十里の處にあり。蒙古への入口にして、恰克圖に通ずる要路なり。○總理衙門 は、即ち、總理各國事務衙門の略稱なり。本衙門は、國帝の命を請けて、外國關係の事務を掌る。親王、大學士、尙書、侍郎、京堂の内をもて兼任するものにして、凡そ外國貿易の事務、各國へ派遣する公使の詮考、外國公使の應接、外人の備解、留學生の進退等、一切外國に關する件は、本衙門において辨理し、直に國帝の裁決を乞ふものとす。咸豐十一年、宣帝の時、創めてこれを設く、初め、親王大臣三名をもてこれに充つ。爾後、漸く人員を増加せり。平日は、總辦章京、及び、章京等の書記官をもて、通常の事務を執らしめ、事あるに當りて、始めて、この會を開く。

三九、鳥居勝高

○作者頼襄の傳は、既に卷一、三〇、「義家學兵法」の條に見えたり。

○鳥居勝高 奥平信昌の家臣なり。死せし時、年三十六。○武田勝頼 信玄の第三子、小字を四郎と稱す。信玄死して、勝頼、國事を見るに、宿將に委ねず。威武、大に衰ふ。後、織田徳川二氏に攻められ、天正十年三月、天目山に走りて自殺し、武田氏亡ぶ。年三十七。○長篠 三河國南設樂郡にあり。鷲巢山 三河國八名郡にあり。長篠城を距ること、大約八丁。○饒道 饒は、音「シャウ」、餉と同じ、饒道は、兵糧道なり。○奥平信昌 貞能の長子、本名、定昌、天正元年、父と共に武田氏に叛きて、徳川家康に歸す。三年九月、勝頼、信昌を長篠城に圍む。家康信長の來り援ふに會し、大に勝頼を破る。爾後、戦ふごとに功あり。後、京師の守護となり、加納の田食邑六萬石を賜はる。二十年三月年六十一にて卒す。○夜絶而出 絶は、説文に、「以繩有所懸也」とあり。夜、竊に、城より繩を垂れ、それにすがりて出でしなり。○遅報 遅は待也。正韻に、「欲速而以彼爲緩曰遲、使彼徐行以待亦曰遲」とありて、今や遅しと待ちわぶる意なり。

四〇、上杉景勝

○作者大槻清崇の傳は、卷一、三七、「清正讀論語」の條に出でたり。

○上杉景勝 長尾景政の子なり。長尾氏亡びて、上杉謙信に養はれて、その嗣となる。元和九年薨す。年六十九。○鹵簿 字書に「車駕法從次第一爲鹵簿」とありて、行列のことなり。○胡孫

欄猴なり。卷一、三七、「清正讀論語」の條に出でたり。

四一、殊勝なる武者振

○作者室直清は、鳩巢と號す。徳川幕府の儒官たり。正徳三年、居を駿河臺に移せるなり、世に呼んで、駿臺先生と稱す。吉宗、統を繼ぐの後、侍講となり、しばし、その諮詢を受けて政事の得失を論せり。享保十九年八月十二日歿す。年七十七。著書甚だ多し。『駿臺雜話』は、病間の筆にて、客に對して清談しける經傳の道、古事逸聞などの要を書き集めたる隨筆なり。上下二卷、數十章に分てり。

○秀康卿 氏は松平、越前福井に封せられたり。家康の子なり。○世祿 世襲の家祿なり。仕官の人に給するものを祿といふ。古は絹、綿、麻布、穀物等の種々のものを以てせしが、後世は、知行、扶持米、給金等を以てするやうになれり。○歴々 増補俳言集覽、「歴々落々在自家肚裡」（小説語）、歴々落々は、ありありとしてといふ意」とあり。この意より轉じて、世に貴く著しき家柄などをいふやうにはなれるなるべし。或はいふ、歴々は歴代相傳の意ならむと。○鎧の着ぞめ 士大夫の息、十四五に至れば、初めて鎧を着け試みしめて、祝せしなり。この着ぞめには、出世のため、時の武功の譽あるものに託して着することなり。○江州志津が嶽 近江國伊香郡にある小岳なり。かの柴田勝家の軍と秀吉の軍と相戦ひて、七本槍の名を残し、より、世に有名な。○余吾の湖 伊香郡、志津が嶽の東北の麓にあり、周回およそ三里ばかり。○勝手 厨、臺

所をいふ。鴨長明の四季物語に、「惣門、勝手の方には云々」。○鎧の威 威といふは、伊勢貞丈の説に緒通の義なりといふ。さればをの假名正しかるべし。鎧の小札を絲又は革にて綴ることにて、緋威、黒革威など種々あり。威は、緘と書くを可とす。○腰の脇指をぬきて引きけり 脇指は、刀の小なるもの、大小の小の事なるよし、貞丈の四季草にもいへり。引くとは、引出物としたりとの意にて、贈興したるなり。昔、饗宴の後に馬を引き出だして、人に興へたるより、物を贈ること、すべて、引出物といひしが、それより又、單に引くともいふに至れるなり。或説には、引きわかつ、ひきあたふなどの意にて、馬には關係なしといへれど、いかゞあらむ。

四二、望琵琶湖

○作者齋藤正謙の傳は、卷二、二八、「摩邪山」の條に出でたり。

○渺瀾粘天 渺瀾は、字書に、「水曠遠之貌」、粘は、「相著也」とあり。○石山寺 滋賀郡石山村にあり。天平勝寶中の創建に係り、良辨僧正の開基にして、眞言宗なり。承暦二年、火を失して、鳥有に歸せしを、建久中に、源頼朝、これを再興し、稍、舊觀に復せり。天正の頃、また、荒壞に屬したりしが、淀君、安民治世を祈り、莊園を復し、伽藍を修めたり。今の本堂は、即ちこれなり。○突怒偃蹇 柳子厚の永州八記中に、石の狀を形容したる字面にして、石の突出して怒れるが如く、また傲れるさまをいふ。偃蹇は、左傳に、「彼皆偃蹇、將棄三子之命」とある註に、「偃蹇驕傲也」と見えたり。○磴 石段なり。○紫姬 紫式部なり。式部丞藤原爲時の女、藤原宣孝

に嫁す。源氏物語を著す。我が國文學の宗とせらる。○風傑 晋書桓温傳に、「温豪爽有風傑、姿貌甚偉」とありて、風格節槩なり。こゝは、風光勝概の義に用ゐたり。○石山秋月 近江八景の一なり。比良暮雪、矢橋歸帆、勢多夕照、三井晚鐘、堅田落雁、粟津晴嵐、辛崎夜雨を合せて、八景とす。○今井兼平 木曾義仲の臣なり。今井四郎と稱す。義仲を輔けて、戦ふごとに勝たずといふことなし。義仲敗るゝに及び、これに自殺を勧め、己もまた敵を衝きて死す。○膳所 本多氏の舊藩地なり。○義仲寺 大津町字馬場にあり。○三井寺 大津の西にあり。天台宗に屬す。天安二年、僧圓珍。勅を奉じて、これを建立し、長等山園城寺と號す。○古關 逢坂の關をいふ。

四三、觀墨水走軻

○作者信夫桑氏は、恕軒と號す。舊鳥取藩士なり。現に東京に住す。赤穂義士銘々傳、恕軒文鈔の著あり。

○宛在水中央 詩經秦風の字面、宛然は、字彙に、「猶依然也」と見えたり。○擊汰 汰は音、テイ、集韻に、「水波也」とあり。○兎兒走水巨魚闔江 二句ともに、艇の水上を駛する形容なり。建長寺の自休の、竹生島に詣でたる詩にも、「綠樹影沈魚上木、清波月落兎奔浪」の句あり。

四四、端艇につきて友人に贈る書

○湘南 相模川(一名馬入川)を湘水といふ雅語にいひならして、その南を一帶に湘南といへり。

こゝにては、大磯を指せるなり。○ボート 即ち端艇なり。○レース 競争といふに同じ。英語。○一橋時代 今の第一高等學校の、なほ、高等中學校と稱せしをり、その校舎、神田の一橋にありしより、同校の學生等、これをさして、一橋時代といふ。學生間の通語なり。明治廿二年の春、本郷の彌生町に校舎の新築ありて。そこに移れり。彌生町の校舎所在地は、もと、向が岡といひしより、向が岡の語は、一つ橋といふ語と相對して、學生間に用ゐらる。○品海 品川灣をいふ。○三又の江 荒川の千住より屈折して、鐘が淵に至る處にて、綾瀬川と合して、墨田川となる處、形三又になれるをもていふ。蘆荻、岸邊に叢生し、一方は、又、遠く、平原に連り、遙に、富士筑波を望むべし。○筑波 常陸國にあり。眞壁、新治の二郡に跨る。峰頭、分れて、二となる。一を男體山オノタマヤマといひ、一を女體山メノタマヤマといふ。古來、有名なる靈山なり。○晴嵐 夕ばれをいふ。○レースコース ボート競争の航路をいふ。墨田川にては、東橋の少し上より、帝國大學の艇庫前まで、凡そ、千メートルを、レースコースと定めたり。○匆匆 消息文例に、「早々は、はやくといふ詞を男文字にかきて、それをもじ聲に、さうくといふにぞありける。されど、みやびぶみに、はやくといふ詞は、いといと稀にて、たゞ、うつば物語藏開の下の卷に、いとひさしや、はやくとあるを、落窪物語に、あな見ぐるし、はやくとあるを、ふたつのみのやうにぞ思はるゝ、さといひたきこともあれど、とりいそぎ、事少なに約めて申上ぐるやうの意に用ゐ來れるが如し。匆匆は、早々に同じ。

卷三 端艇につきて友人に贈る書

卷三 終

三八

明治三十六年六月廿四日印刷
明治三十六年六月三十日發行

非賣品

編輯者 明治書院編輯部

發行者 三樹一平
東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷者 三島宇一郎
東京市神田區表神保町二番地

印刷所 弘文堂
同所 (電話本局二三一六番)

不許複製

發行所 明治書院
東京市神田區錦町一丁目
電話本局二四三八番

